

# 太田東西かわら版

おんころころせんだりまとうぎそわか

2021. 8

## 「在宅」のすすめ



写真は胃摘手術後に退院、無事に自宅に帰還した義母の幸子さん。大量の吐血で失血死しそうになりましたが、輸血と緊急手術により事なきを得ました。

しかし、病気そのものは治っていません。その病気とは悪性リンパ腫。血液（リンパ球）のがんです。

7月上旬、退院後すぐに化学療法（抗がん剤治療）を受けるように病院からすすめられました。

「悪性リンパ腫撲滅に化学療法を行う」。それは医学的には常識です。しかしその進行度、84歳という年齢、失血と手術での体重激減・・・それでも「副作用覚悟」で治療に臨むべきか？

先月、私は3回上京しました。  
医者との話し合い、家族と話し合うために。

妻の家族に一番伝えたかったこと。それは、悪性リンパ腫の治療だけに目を向けて、それに一丸となって頑張ることは必ずしも「是ではない」ということです。

病気の、その先にあるものから目を背けない。目先の病気だけを考えていては後悔する結末になりかねません。

病気の先にあるもの、それが「死」「死別」です。

「親に対して死の話はかわいそうでできない。悲しませたくない」  
そうした家族の気持ちはわかりますが、その日は必ず来ます。  
後悔のないエンディングを迎えるためには、家族の誰かが、そこに踏み込む切り込む必要があります。

「死別を前提にして病気と向き合う」

その意識があるかないかで、どう過ごしていくか？は変わります。  
私は幸子さんに化学療法を受けた場合、想定されるデメリットを説明しました。  
抗がん剤の副作用よりも辛いことは、家族と会えなくなることだと。

実際、幸子さんは先の入院で面会謝絶を経験したばかり。  
化学療法をするなら、入院は必至。必然の面会謝絶。  
病気を治すためとは言え、副作用に耐え、孤独に耐えることができるか？



「化学療法はさせたくない」。妻のきょうだいは結論に至りました。幸子さん本人も最初は半々の気持ちから、受けない気持ちになりました。それだけ術後の体力低下を実感したのだと思います。

そして、幸子さんは私に言いました。

「太田さんにすべてお任せします。最善の漢方よろしくお願いします」



私たち家族は、

大学病院での高度医療ではなく、〈在宅医療〉を選択しました。

悪性リンパ腫完治を、存命をあきらめたわけではなく、幸子さんの「QOL（生活の質）」を最優先に考えたのです。

化学療法の結果に一喜一憂する、薬の副作用で苦しんでいないか？と心配して別々に過ごすよりも、最期のその日まで、家で一緒に、顔を見合って過ごすことを選択したのです。

次の上京では



妻がテルミーをかけてあげました 😊

## 今月号のタイトル 「在宅」のすすめ

「不要不急の外出は自粛して在宅しよう！」ではありませんよ(笑)

通院治療という今までのスタイルから、〈在宅医療〉という選択枝もある。太田東西薬局のお客様には、それをもっと意識してほしいと思います。

病気になった時、病院に出向くのは当然です。検査を受けて、病名を付けられ薬を処方される。それで早く治ればいいのですが、幸子さんのように高齢かつ難治性疾患の場合、通院はとてもストレスがかかり、著効も期待できない。

となった場合、それでも病院を受診し続けるか？ それとも我が家のように「在宅」の往診を選択するか？

いずれにしてもこれからの日本は、「自宅死」にシフトしていきます。患者が希望してではなく、シフトせざるを得ない超高齢化社会だからです。そこに昨年からのコロナ感染騒動による隔離・面会謝絶。最悪、「入院＝今生のお別れ」になる可能性もある。

「どこでどんなふうに最期を迎えたいか？」  
家族でしっかり話し合っておくことをおすすめします。

在宅は在宅で、家族に看病・介護という負担がかかってきます。衰弱していく家族を目の当たりにするのは辛いものです。しかし、家族にやれること・できることはたくさんあります！

人が老いて病んで死んでいく時に大切なものは、検査でも薬でもなく

**「笑顔」「触れ合い」「声掛け」**



お客様ご家族の  
それをサポートするサービスが

**HOT（訪問太田東西）**

です！＼(^o^)